

教え子のみなさんから多くのことを学ぶことがあるが、部活動での教え子たちもいる。

2校目のH中学校へと移り、ソフトテニス部の顧問となった。私は中学1年から大学4年まで、ずっとソフトテニス（軟式テニス）をやっていた。あの当時の私の指導は、簡単に言えば厳しい指導である。今思えば、「なんであんなに厳しかったんだ」と自分でも思うくらいである。

それでもありがたいのは、H中学校ソフトテニス部の教え子たちが、その後に勤務したS中学校やF中学校のテニスコートに来てくれたことである。テニスコートに来て、私と話して帰る教え子もいれば、現役プレーヤーである教え子は生徒の指導までしてくれた。よく考えると、指導しているのは自分の中学校の後輩ではないわけである。練習の最後に、私が「一言お願いします」などと言ってしまったら大変である。私以上に厳しい言葉が出てくる。聞いている私は「すごいなあ、成長したなあ」と感心するばかりである。

3校目のS中学校ソフトテニス部の教え子は、4校目のF中学校のテニスコートに現れる。そして、生徒たちの相手をしてくれる。私の部活動顧問はF中学校で終わることとなった。では、F中学校ソフトテニス部の教え子かというと、私の娘とそのチームメイトの指導をしてくれたのである。あるいは、私が福島県選抜チームの監督のときには、選抜チームの相手をしてくれた。

何とありがたい教え子たちなのであろうか。あれほど厳しかったのに。でも、4校目のF中学校のテニスコートでは、教え子たちに心配された。「どうしたんですか、先生」と。私がおとなしくなっているので、心配してくれたのである。中学校の部活動は、もはや私がおとなしくならざるを得ない時代になっていたのである。

3校目のS中学校ソフトテニス部には、こんな教え子もいた。3年生の県大会で引退し、2学期が始まると、その生徒は毎朝誰よりも早く登校してきて、教室で勉強をしていた。私は、それがずっと続くので、本人に聞いたことがあった。「なんでそんなに毎朝早く来るの」とすると、第一志望の進学校に入りたいのだが、今の成績では入れる状態ではない。だから、毎日頑張るのだと言うのである。「つらくはないのか」と聞くと、「部活に比べれば、大したことはありません」という答えが返ってきた。うれしいのやら悲しいのやら。結局、彼女は見事に第一志望校に合格するのである。彼女のあきらめずに努力する姿から教えられた。

彼女は、その後、国立大学の看護学部に進み、現在、東京の病院でりっぱに看護師として活躍している。ここ数か月は新型コロナウイルス感染症対策で大変な状況であると思う。だが、彼女なら、人のため、世の中のためにがんばってくれるはずである。

数年前までは、よくテニスコートに行っていた。すると、テニスコートで、かつての教え子たちと会うことがある。そこで、近況報告を聞いたり、他の教え子たちのことを聞いたりしていたものである。こんなこともあった。「今度〇〇が結婚するので、高澤先生にビデオメッセージをお願いしたいのです」ということで、急遽テニスコートでビデオメッセージ収録となったこともあった。

私がうれしいのは、高校に行ってもソフトテニス続ける生徒が多いこと、高校で部長を務める生徒が多いことである。部活動を通して得られるものは大きいと思う。今は昔のような指導は難しくなっている。指導者には、ただ熱心なだけではなく、時に自分を客観視できるバランス感覚が求められている。情熱がそのまま伝わるわけでもない時代になっている。自分が管理職になって思うことは、自分のような部活動顧問がいては大変だろうなということである。お世話になってきた管理職の皆様に感謝である。

(次号に続く)